

# 乳児の遊具をめぐって

齋 藤 貴 子

On Toys for Babies

by

Takako Saitō

## はじめに

日本では、幼稚園や保育所などの幼児保育施設で保育を受ける子どもの比率が以前に比べて高くなっている。小学校新1年生中、これらの園の卒園児の占める割合は90%を超えているが、このことは、幼児の教育に対する国や国民の関心の高さを物語っているといえる。一方、そこにおける保育内容についても、この期の子どもの発達がその後の人間の発達に重要な影響を与えるという認識が深まるにつれ重視されてきている。

ところで、先回の保育所児を対象とした遊びの調査によると、自然物を利用した遊びよりも既製遊具を使用した遊びが多く観察されている。一方、これらの既製遊具の購入に際しては、十分な配慮がなされているとはいいがたい状況がある。同種の遊具が、方々の施設でわが物顔に存在している光景も多く、又、遊具の購入は業者任せという園もある。物の豊かさが逆に子どもの犯罪、自殺、精神障害などの人格的崩壊の引き金になっていることも多いことを想う時、人間の発達の土台である乳幼児期に、物との真のコミュニケーションを確立できることは、人間とのコミュニケーション確立と同様、重要なことであろう。この期に物とのコミュニケーションを確立するということは、どうということかという素朴な問題意識から、乳児（誕生から満1才まで）の遊具について洞察してみた。

## I 子どもの生活と遊具

遊具という日本語について和久洋三<sup>2)</sup>は、これは欧米の保育書の中の Play things を翻訳した学者の言葉であろうと指摘しているが、日本語のおもちゃ、玩具、遊具、教具の概念は明確ではない。

民族学の柳田国男は、その著「子ども風土記・母の手毬歌」<sup>3)</sup>の中で、おもちゃの起りを「近年ブリキ・セルロイドが目まぐるしく新を競うようになるまでは、われわれのおもちゃは不思議なほど種類が限られていて、どうやらその一つ一つから根原を尋ねて行かれるらしく思われる。だいたい、以前の玩具はほぼ三通りに分けることができたようである。最も数多いのは子どもの自製、拾ってすぐ棄てる草の実やどんぐりのようなものから苗株あねごとか、柿の葉人形とかの、うまくできたらなるだけ永く大事にしてしまっておこうとするものまで、親も知らないうちに自然に調えられる遊び道具、これを子どもは『おもちゃ』というものの中に入れていない。オモチャという語のとは、東京では知らぬ者が多くなったが、今も関西でいうモチヤソビの語に才を

つけたものにちがいない。その弄<sup>もてあそ</sup>び物を土地によっては、テムズリともワルサモノともいって、これだけは実は母や姉の喜ばぬ玩具であった。もっとも普通に使われるのは物さしとか籠<sup>へら</sup>の類、時としては鉞<sup>はさみ</sup>や針などまで持ち出す児があって、あぶないばかりか、無くしたり損じたりするので、どこの家でもそれを警戒した。そうしておいおいとその代りになるものを、こしらえて可愛い子には与えたのだが、最初はそれもただ親たちの実用品のやや小形のもの、たとえば小さな籠<sup>かご</sup>とか桶<sup>はうき</sup>とか、箒<sup>ほうき</sup>や農具の類が多く、子どももまた成人と同格になったと思ってそれを喜んでいたようである。

それから第三には、買うて与える玩具、これが現今の玩具流行のもとで、形には奇抜なものが多く、小児の想像力を養うには十分であったが、如何せん、そういう喜びを味わう折が以前はきわめて少なかったのである。おみやげという言葉でもわかるように、本来は物詣りの帰りに求めてくるのが主であって、したがってその種類も限られており、だいたいにお祭に伴なうものばかり……簡単な仮面とか楽器とか、または神社から出る記念品のようなものであった……あんなオジャブリのような小さな玩具でも、やはり最初は、御宮<sup>おみやげ</sup>筥であり、……日本人の信仰から生まれて発達したものだ」とし、日本民族の生活文化の中で、民間伝承を手がかりにおもちゃの位置づけを試みている。

ソビエトの心理学者、デ・ヴェ・エリコニン<sup>4)</sup>は、子どもの遊具について、次のように独自の論を展開する。

「遊びがその内容の面で社会生活によって決定され、一方あらゆる遊びの必然的な随伴物であるオモチャが、社会生活と何ら関係をもたず、また何らかの不変的な、純粋に人間に本来的な子どもの特殊性に依拠しているということがありうるだろうか？……現代の就学前児童の部屋は、未開社会に存在し得ないオモチャで占められている。……中略……『昔からのもの』と呼ばれているオモチャは、その発生の歴史をもっている……たとえば、弓とか矢は昔から存在したわけではなく、人間社会の一定の発展段階で発生したものである。弓や矢は実際の狩の道具として社会にあらわれたその後、はじめてオモチャとなり得たのだということは全く明らかなことである。他の『昔からの』オモチャについても同じことがいえる。……中略……人間社会の発展の一定の歴史的段階で一たび発生すると、オモチャはその見本となった道具の消失と同時に消えるわけではない。……労働具をまねたものであるオモチャは労働具より長く生き残る。……これらのオモチャは、実際に、あたかもその発展をやめたかのように、原始的な外見を保っているのである。しかしこれらのオモチャに歴史が存在しないのは、オモチャの社会的機能や子どもとその発達の行程との関係を分析せず、単に現象的に吟味した場合だけである。……中略……このようにして『昔からのもの』と名づけられているオモチャは、その外見だけが変らないまま残っているだけだ。実際には、それはすべてのオモチャと同様に、発生し、歴史的に変化しているのである。その歴史は、社会の歴史と社会における子どもの地位の歴史的発展と有機的に結びついている。その結びつきを理解することなく、それを正しく理解することはできるものではない。……すなわち、オモチャの歴史を、社会の歴史、社会における子どもの地位の発展の歴史から分離して検討してはならない。」<sup>4)</sup>彼はこのように、おもちゃも社会の生産活動——つまり、生産力としての物質的手段およびそれが用いられて生産と交換がいとなまれる場合に必然的に人々がとる相互関係、生産関係との関連で把えなければならないと考える。

デザイナー和久洋三は、童具（彼はこの言葉を、おもちゃ、玩具、遊具、教具など童が遊ぶ、行為する、作業する時の用具、道具という意味で使用している）には、二つの要素があって、この要素が童具の歴史をつくり出してきたととらえる。

そのひとつは、人間、動物、家、自動車、汽車、食器などを象りミニチュア化したもので、身近な生活の中の子どもに関心のある具象物である。彼はこれを「具象童具」と名づける。もう一つは、ボール、フープ、ケン玉、おはじき、コマなどのような素材性の高い内容をもつもので、フォルムに即物的な意味あいがない形態のものであり、彼はこれを「抽象童具」と名づける。

このように和久は、童具を現実生活と関連させて具象、抽象という形態的側面からの分類を試みている。

以上、柳田、エリコニン、和久の遊具に関する具解には、遊具に対する民俗学、心理学、デザイン学という専門領域の特性のみならず、各氏の物と精神とに対する哲学的立場が表明されていることがわかる。

ところで、子どもの遊戯が独自の活動として認められたのは、未開社会の子どもの遊戯から推察するとすでに原始時代に遡ると説く人が多い。フープはギリシャ時代からあり、ヨーヨーは古代極東にすでに存在していたらしい。ボールは、紀元前15世紀のエジプト第18王朝の墓の中に納められていたことも含めて考えると、おもちゃの歴史も古いことがわかる。しかし、これらおもちゃを遊びに使用できたのは、一部の人々で、大多数の人間にとっては無縁なもの、手に入らないものであったと思われる。日本で、文献上子どもの遊戯が登場してくるのは、平安時代以降である<sup>5)</sup>。しかし、特定のおもちゃを使用して遊戯に興じていたのは、やはり殆んど上層の子どもであったと考えられている。日本では、古くから「子やらい」の風習があり、7才までは人間ではなく神さまの世界の者とみなされていた<sup>6)</sup>。このことにも当時の世界の宗教観、生産力の低さや疫病の流行などから高い乳幼児の死亡率を出さざるを得なかった当時の民衆の生活を読みとることができる。

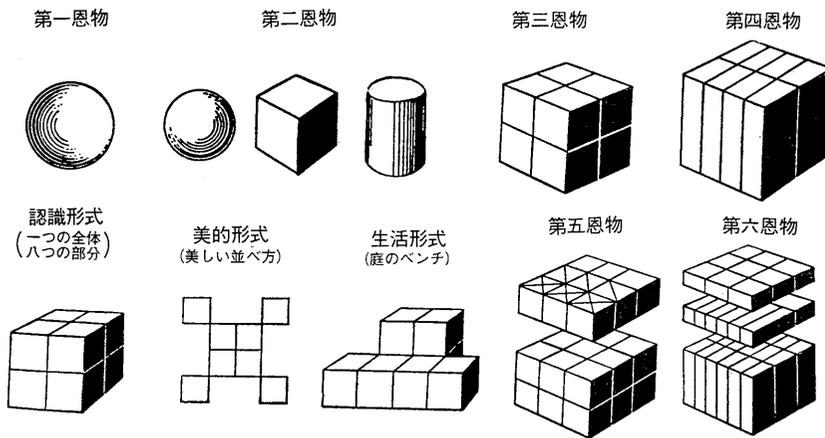
乳幼児が大人とは独立した人格をもったものとみなされるようになったのは、外国でも日本でも近年になってからのことである。ルネッサンス期以降、コメニウス、ロック、ルソー、ベスタロッチー、ザルツマン、カント、シラーなどにより子どもの世界に対する認識が深められ、フレーベルによって幼児の遊びが教育的価値をもつ活動であるとの理解にまで深められた。フレーベルは、この理解に立って精力的な保育の実践活動を展開したのである。その実践活動のひとつとして、彼は自己の「神性啓培観」にもとづき、「恩物」という独特な遊具を製作し実践に用いている。彼が考案した恩物は、今日なお遊具のデザインに多くのヒントを与えてくれている。

フレーベルの教育思想の特色は、「神と自然と人間との内的関連に基づくところの神的統一にある。神は絶対的法則として、一方、宇宙に内在しており、万物に命を与え、万物の本性を形成し、同時に他方、宇宙を超越しており、万物を支配し規定している。」という万有在神論であり、彼は「この宇宙を一大有機体と考えて、鉱物・植物・動物・人間・天体などのすべてを一貫する統一性すなわち万物に共通する神性を認め、この神性が万物の本性を形成するとする。したがってこの本性を表現し発展させることが、万物の使命である。しかも人間は、他の万物と違って、知的・理性的・行動的・形成的・創造的な特性をもっているのです。その本来的な神性を意識的に実現することが可能である。教育の目的は、このような人間の使命・本分を果たすための手段に他ならない……教育の任務は、まず子どもの生命の内部的な発展をはばむ条件を取り除くことである。つぎにその内部からの発展を助長することが必要である。しかもその内部からの発展は、子どもの興味や要求にも即したところの創造的な自己表現、自己のうちに秘められた神的なものの自己表現すなわち『自己活動』(Selbsttätigkeit)に現われるから、教育はこの自己活動を尊重しなければならない。そして自己活動の指導に努めることである。それによってやがて人間は、自己の内的生命を形成し、自覚的に表現してゆくことができる」というところにある。「神性啓

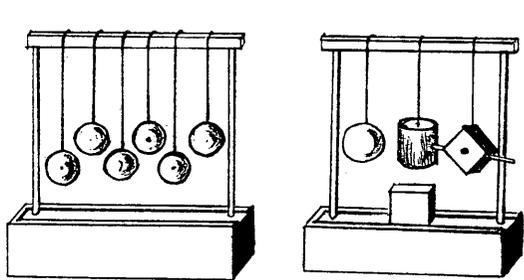
「培観」という神性の発展のうちに人間をとらえようとする彼にとって、人間の最初の段階である幼児期は、とくに重要な時期と考えられた。それは、この時期が環境の人々や事物を理解し、その内面的本質を把える最初の出発点であり、「子ども個人の成長発達は、直接に人類の成長発達に関連している」という自覚によるものであったらしい。このような使命感にもとづいて彼は幼児の教育に専心したのである。

その幼児教育の具体的方法として、まず家庭教育にあっては、「先天的な能力や性向を目覚めさせ発達させ、能力や性向の要求に応じようよう四肢や感覚諸器官を訓練すること」を重視し、母親が子どもと関連した外界や動作（身体諸器官の区別や名称・外界の事物の名称・性質・動作と結果・事物の変形・自己動作などの知識）を子どもに提示することをすすめた。子どもの起立と歩行を契機として、さらに知育を実行することをすすめている。また、身体のために、健全な栄養の食事と自由な運動を促すことをすすめ、そのために律動的運動と規則正しい生活を行なわせることが有効であり、このような生活を通して作業と学習が修得され、独立心が養われていくと考えたのである。遊びについては、幼児の自己活動は遊びのうちに、もっともよく表現されるものであるから遊びを保護し、励まし、指導せよと父母によびかける。その指導の際には、「恩物」を媒介することで幼児は宇宙の理法を知ると同時に神の認識に達することができると確信していた。彼が考案した恩物は六種であり、現在ある二十種のうちの十四種は弟子たちが発展させたものだとわている。六種の恩物とは次のようなものであった。（図1）

図1 フレーベルの恩物



高山正喜久氏の「立体構成の基礎」より



塊を積む

教師養成研究会「近代教育史」より

恩物の一部。第一および第二恩物

- 第一恩物<sup>8)</sup> 球一赤、橙、黄、緑、青、紫の六個の糸の玉。球には完全、統一均整の諸原理が含まれている。
- 第二恩物 球、円筒、立方体、これらにより多様性と変化性を知らせる。球は動的、立方体は静的、円筒は両者を統一する媒介性あり。
- 第三恩物 立方体を八箇の立方体に分割。これにより全体と部分、形のほかに大きさ、内と外というものを感じとらせる。
- 第四恩物 立方体を八箇の柱に分割。
- 第五恩物 立方体を二十七箇の立方体に分割。うち六箇は斜めに分割する。
- 第六恩物 第四恩物の発展形。

このフーベル考案による「恩物」は、その後、その内容の抽象性と与え方が幼児の自由な活動を妨害するとして批判をたびたびもしているが、<sup>10)</sup>現在も玩具の世界に根強い影響力をもっている。

## II 乳児遊具のデザイン

子どもの遊びの中で、遊具は子どもの心理とどんな間柄にあるのだろうか。

ソビエトの心理学者、ア・エヌ・レオンチェフはかつて子どもの遊びについて「動機が過程そのものにあるというような構造をもった活動<sup>11)</sup>」と定義づけた上で、「若干の高等動物にもすでに遊戯活動が見られる。だが、子どもの遊びは、幼いときのものであっても動物の遊びとはまったく似ていない。就学前前期に最初の萌芽形態がみられる人間の子どもの遊戯活動と動物の遊戯活動との特異的差違はどの点にあるだろうか？就学前前期の遊びと動物の遊びとの特異的差違は、前者が本能的活動ではなく、まさしく人間の対象的な活動——それは、子どもが人間的対象の世界を自覚する基礎となり、子どもの遊びの内容を規定するものである——という点にある。これこそ子どもの遊びを動物の遊びから区別する第一の点である」と人類の発展史との関連で乳児の遊びをも位置づけようとした。彼は、子供の発達に段階的に同一速度で進行するものでなく、各発達段階における主導的活動がその期の子供の人格の発達の主役になっており、遊びは三才から六才頃の、いわゆる就学前期の幼児の発達にとって主導的活動であると仮定した。

教育学者西頭三雄児は、現象学的に遊びの根源現象を考察したショイエルルの研究を手がかりとして、遊びを「心的主観（意志、知性、感情）の機能、活動でなくて、むしろこれを含み、しかも基礎づける精神的主観による、浮動的・循環的運動<sup>12)</sup>」と仮定した。

この2人の遊びに対する定義は、遊び研究に対する作業仮説という性格上抽象的な表現になってしまっており、両者とも遊具の定義づけは行っていない。心理学研究においては、人間の心理そのものが研究対象とみなされ、人間以外の物では動物までは研究対象になることはあっても、物の内面（質的側面）に対する考慮は十分行なわれてこなかったように思われる。（この点の正確な確認作業を実施する必要があると考えている）しかし、遊具のデザイン問題を考えるにあたっては、それをとり囲む人間の心理、遊具の本質の両者をおさえておく必要がある。

遊具を扱う乳児の発達については、心理学的研究が多く試みられてきており、その発達の特性もかなり明らかにされてきている。しかし、その研究が立脚する哲学的立場の違いによって、発達段階の区分の仕方、各期における発達のメカニズムの解釈などに相違がみられ、しかも教育との関係に対する見解も加わって諸説乱立しているが、大別すれば、遺伝論に立つ発達論と環境の役割を重視する環境論の立場に立つ発達論、折衷主義の立場をとる発達論とがある。しかも、概

して多くの発達論は人間一生の全体的発達の中に位置づけて乳幼児の発達にメスを入れているのではなく、逆に乳幼児期の発達を明らかにすることでその後の発達の全貌も解明されるであろうとする見通しで人間の発達を扱っていることが多い。

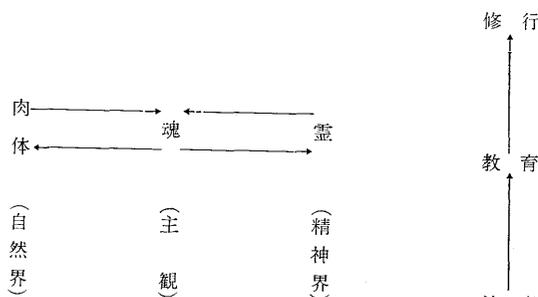
ルドルフ・シュタイナーは、人間は体と魂と霊とから成り立っていると<sup>13)</sup>する。教育者、建築家、ゲーテ学者、有機農法の創始者、医師でもあった神秘主義者シュタイナーは、人間は一生を七つずつの、七年毎の大きな周期を繰り返して発展させるという思想の上に立って乳児の発達もみている。0才のはじまりに母胎から地上に生まれ出た子供は、だんだん自分の肉体を成長させていく過程の中で、自分の肉体の物質的に一番固い部分である歯が生え替る時期に、肉体の形成を一応完成させるのだと考える。脳の組織も基本的に整うこの間に、人間の総てのエネルギーがこの肉体の基礎を形成することに集中する。この期間の子供は、全くの催眠状態で外に向っており、大人が想像できない位の大変なエネルギーをもって感覚体験を日々営んでいるので、外からのプラスになる印象もマイナスになる印象も模倣行為を通して自分の肉体の基礎にしてしまう。この模倣衝動はこの期間の子供にとって最も大事な魂の営みであるから、教師は、徹頭徹尾幼児の模倣衝動を満足させる必要がある。このような中で、人間存在にとって根拠となる意志が肉体と結びついて形成されるのであると彼は考えた。

人間を体と魂と霊とから成り立つと考える彼は、事物と人間とのかかわりを次のようにみている。

「体を通して、人間は一時的に自分を事物と結びつけることができる。魂を通して、人間は事物が与える印象を自分の中に保持する。そして霊を通して、事物自身がみずから保持しているものが彼に啓示される。人間をこの三つの側面から考察するとき、はじめて人間の本性の解明が期待できるようになる。なぜならこの三つの側面は人間が三重の異なる仕方で世界と同質の存在であることを示しているからである。

体としての人間は、感覚に対して外から自己を現わすところの事物と同質である。外界の素材がこの人間の体を構成している。外界の諸力がある中にも働いている。そして人間は、外界の事物を感覚によって観察するのと同じ仕方で、自分自身の身体的存在をも観察できる。しかしこれと同じ仕方で魂の存在を考察することはできない。私の体的事象のすべては身体的諸感覚によっても知覚できる。私が好んでいるか、嫌っているかということ、私の喜びと苦しみは、私も他人も身体的感覚によっては知覚できない。魂の世界は、体的な見方にとって手のとどかぬ領域である。人間の体的存在は万人の眼に明らかである。魂の存在は自分の世界として、人間自身の内部

図2 シュタイナーによる人間の本質



高橋 徹による  
「生きる意志と幼児教育」<sup>13)</sup>より

で担われている。しかし霊によって外界は高次の仕方で人間に示される。外界の秘密が明かされるのは人間の内部においてであるが、しかし人間は霊的存在として自分の外へ出ていき、そして事物に事物自身のことを語らせるのである。彼にとって意味あることをでなく、事物自身にとって意味のあることを。人間は星空を見上げる。魂が受ける感動はその人間のものだ。しかし彼が思想として霊において把握する星々の永遠の諸法則は彼ではなく、星々自身に属する<sup>14)</sup>。このよう

に、彼は外界の事物を、全的人間と相対するものとしてではなく、人間の中の鉤物としての自然界、動物としての主観の世界、人間としての精神界の輪廻転生的成長のそれぞれの対称の位置に置いてその人間的意味をよみとっていることがわかる。

人間の心理を科学的に解明しようとする心理科学研究会の会員達は、乳児の発達を田中昌人らの障害児保育の実践的研究を手がかりにして次のように把えることを試みた。(表1)

まず、乳児の発達は、その質的内容によって大きく乳児前期の発達と乳児後期の発達とに分けられるとする。乳児前期は、外界の刺激をうけとめ、外界に働きかけていく器官である手の系(末端投射活動系)の成立を中心にした、特に主体的にとりくみを発動しうる体制をつくりあげる時期である。この期はさらに外界を主体的にうけとめていく体と心のありかたが三つの段階を

表1 田中昌人らによる発達の質的転換期とその特徴

質的転換期	行 動 特 徴	姿 勢・反 射
乳児第1転換期 生後4週ごろ	視野に入ったものを注視する 音がすると身動きを止める <外界の刺激を“点”としてうけとめる>	人形の眼反射消失 ATNR 姿勢 把握反射
乳児第2転換期 (9~12週)	音や物体の方に顔をむけ180°追視する, 自分の手をみる, 親指を吸う, ガラガラなどもたせると数秒間握る, あやす と発声したりわらいかえす <外界の刺激を“線”としてうけとめる>	ATNR 消失し, 左右対 称姿勢とる 把握反射消去
乳児第3転換期 (17~20週)	音や物体を360°追視する 両手をくみあわせる 手に触れたものをつかむ 自分の方から保育者にはたらきかける <外界の刺激を“面”としてうけとめる>	頸定 坐位
乳児第1転換期 (24週ごろ)	物に片手をだしてつかむ(新しいものをさし出すともう一 方の手を出す, 今まで握っていた方を落とす, 布をかける ともっているものを落として布をとりのぞく) 熊手状把握 <外界との結び目を1つつくる>	坐位確立 寝がえり 眼と手の協応
乳児第2転換期 (34~40週)	両手におもちゃをもち, うちつける(その時顔に布をかける と多くは逆利手のおもちゃを落とし布をとりのぞく) 指尖把握(小さいものをつまみあげ口にもっていく) 模倣をする(バイバイ, パンザイ, アババなど) 人みしりをしはじめる “ウマウマ, マンマンマン”……などの喃語をしゃべる <外界との結び目を2つつくる>	這行・伝いあるきなど本 格的な移動をはじめる
乳児第3転換期 48週ごろ	両手におもちゃをもち, さらにもうひとつに手を出す。 (おもちゃを両手にもったまま, 顔に布をかけると両手にも ったまま, または下に“おいて”布をとる) 釘抜状把握 喃語が“マンマ, ネンネ”……となり状況と結びつくよう になる, ものをつつくような指さしをはじめる 禁止を理解する “チョウダイ”をすると手に持っているものをくれる <外界との結び目を3つつくる>	片手支持歩行

もって変化していくと考える。その質的転換期は、生後4週、9～12週、17～20週ごろにとらえられる。この三つの段階は、軀幹—腕—手というように回転性をもつ系が連関して成立し外界のはたらきかけを軀幹でうけとめていたのが、次の時期には軀幹から腕へさらに腕—手へと変化していくことにより、生活のきりひらき方をより高次なものにしていく時期とし、心的あり方としては、外界を点、線、面的にとらえられる段階として考えられるとする。乳児後期は主として、前期で獲得した体制一手を中心にして、自分のまわりにある様々な対象に主体的にとりくみを開始し、それによって自分の中に「ことば」の基礎をつくりあげる時期である。この時期にも三つの質的転換期がみられ、この時期を田中らによる「外界との結び目をそれぞれ1つ、2つ、3つ作って外界に働きかけていく三時期」としてとらえることを試みる。<sup>15)</sup>この発達のとらえ方には、大脳皮質の発達が何よりも乳児の発達に決定的な影響を及ぼし、しかもその皮質の発達は、外部からの大人による働きかけに大きく依存するという立場が貫ぬかれている。

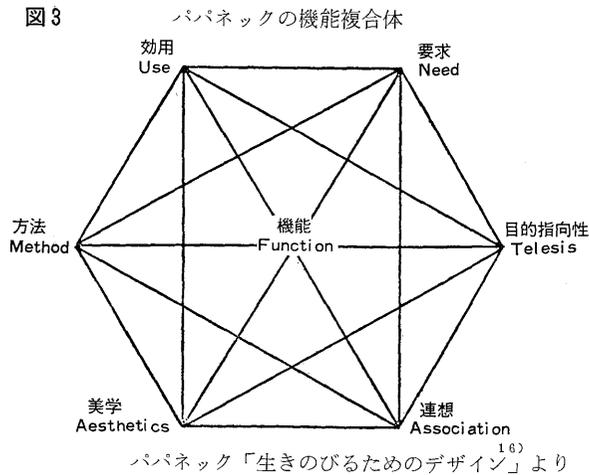
ともあれ、神秘主義、科学主義という立場を異にしながらも、シュタイナーが人間一生の発達の中で乳児期は肉体（意志力）を形成する時期であり、しかもそれには外部からの刺激（特に大人からの）が大きく影響するとみている立場が心科研の大脳皮質の発達と大人との関係の中で乳児が発達するという理想的形態と類似しており、興味深い。しかし、後者の場合、人間一生の発展、ものと心との関係に対する洞察は、物の機能的関係に留まり、物の奥深い内面までは踏み込んでいないことに気づく。この点については、霊学者のシュタイナーの方が先見の明があったといえる。

ところで、現在のところ、乳児にとって遊びは幼児ほど他の活動とは分化した内容をもった活動とはみなされていないようである。それゆえ、乳児の遊具は、遊びというよりは乳児の発達全体に有効な役割をもつ物として位置づけておくべきであろう。しかも、乳児にとって、大人との心的交流の質がその発達を大きく左右する。それゆえ、遊具はそのコミュニケーションの質を高め、又コミュニケーションが遊具の質を高めるという方向でとらえられることが望ましい。

さて、本論に入って、遊具のデザインについて考えてみよう。そもそもデザインとは何か。この問に対して、ヴィクター・パパネックは次のように答えている。

「ほとんどどんなときでも、われわれのすることはすべてデザインだ。デザインは人間の活動の基礎だからである。ある行為を、望ましい予知できる目標へ向けて計画し、整えるということが、デザインのプロセスの本質である。デザインを孤立化して考えること、あるいは物自体とみることは、生の根源的な母体としてデザインの本質的価値をそこなうことである。——略——デザインとは、意味ある秩序状態をつくり出すために意識的に努力することである。——略——デザインは意味あるものでなければならない。〈意味のある〉という言葉が、〈美しい〉、〈醜い〉、〈冷たい〉、〈かわいい〉、〈くやしい〉、〈写実的な〉、〈あいまいな〉、〈抽象的な〉、〈すてきな〉といった、もうその意味が飽和状態になってしまったような言葉にとって代るのである——略——デザインがその目的を充足するための行動様式は機能である。<sup>16)</sup>彼はこの機能という複合体概念を構成している動的な諸関係を次頁のような（図3）を使って説明している。

ところで、彼がここで使用している「望ましい予知できる目標」とか「意味ある秩序状態」という言葉は具体的には何を意味するのか明示されていない。しかし、彼はすべて専門化ないし分化の過程を過度に進めてゆくことは絶滅の道であり、「われわれの社会はそのように組織づけられているのだ。」とデザイナーに警告を発していることから推察すると、「望ましい予知できる目標」とか「意味ある秩序」とは、単にデザイナーに決定される概念でなく非専門的、相互作用的



で幅の広い見方の中でこそ具体化されると考えているようである。かつて、高田哲雄は、デザインを「人間にとって創造的生存の目的を充足する為の機能構造の実現行為<sup>17)</sup>」であるとして川添登のデザイン分野についてのモデルを発展させ「デザイン学の体系と周辺学問領域との関連」についての構造化を試みているが、これはパパネックのいう「デザインの目標概念」を具体化させる上で重要な手がかりとなるモデルとなろう。

以上のことを踏まえ、再度、遊具

のデザインの問題に目を転じよう。

乳児の遊具デザインの目的は何か。これについては、「乳児の発達、とりわけ感覚器官と意志力（肉体）との意味ある内容を形成する」ことに貢献することととりあえず押えておくことにする。その実現にあたっては、川添氏のモデルを借用すると、単に製品のデザインのみでなく、乳児（大人）が生活する環境全体への洞察、乳児との間にどのようなコミュニケーションを形成しているかなどへの洞察の上で立ちとり組むことが不可欠であると考えられる。

### Ⅲ 乳児の遊具のデザインングをとり入れた心理学の授業

人間にとって、それをとりまく事物、空間のデザインは、社会環境的デザイン、コミュニケーション（人的）デザインとともにそこに生起する顕在的、潜在的心理現象と密接な関係がある。しかし、心理学では、ともすれば、人間の心理のメカニズムの一般的法則に目が奪われて、具体的な事物のデザインなどは軽視し、もしくは敬遠していたきらいがあり、むしろ、こうした分野は他の学問領域に属するものと考えていた傾向が強いように思われる。それゆえに、心理学の授業も、人間の心理の法則追求面が強くて、授業の中で「物をつくる」ことなどは狂人か異端者の考えることぐらいに見なされる傾向が強い。しかし、デザインの世界が、自己の生き方に対する洞察を必要とし、かつ、周囲の人的物的環境への洞察をも必要とし、何よりも形づくることでそれらの内的世界を実感できるという側面をもっているため、心理学の授業の中に「乳児の遊具」をデザインする課題を導入してみました。

この授業は「演習」になっており、幼稚園、保育所の教員、保育資格取得希望者の必須修得科目になっている。筆者は、昭和55年の演習に遊具のデザインングを導入してみました。導入のねらいは、科学と芸術活動との統合は不可能なのかという長い間の自己の問題意識を実現しようという極めて漠としたものであった。幼児教育科の2年生を対象にした授業は、夏休み前のほとんどがテキストを使用した乳児の発達についての学習であった。使用テキストは、主として「児童心理学試論<sup>15)</sup>」（心理科学研究会編）、「生きる意志と幼児教育<sup>16)</sup>」（高橋巖—ルドルフ・シュタイナー研究所）などである。乳児の遊具のデザインングは、夏休み中の課題として自宅で行なわせている。休み直前の演習では、画集「数学的魔術の世界<sup>19)</sup>」（エッシャー）、「The Inspector<sup>20)</sup>」（スタインベルグ）、「Art forms in Nature<sup>21)</sup>」（アーンストハイケル）などをも見せている。これらを使用した意図は、

その内容が自然の美の中の神秘性、科学性とを統合するような内容であったり、言語の生命を表現しているものであったり、絵そのものが言語のような独特な構造をもっているもので、心と物との関係を見事にとらえている内容をもっており、遊具のデザインングに有効なヒントを提供するものと思われたからである。特に前二者は、従来、芸術がどちらかと言えば現実の存在が感情に訴えかける印象のみ記号化しすぎる傾向があり、他方科学が存在の背後の法則性を記号化することに陥りすぎる傾向があったのを統合するような形で、見えない世界を知覚の記号化を通して探ろうとする内容をもっているように思われる。

さらに授業では、日本の伝統的な乳児用遊具、外国の遊具などの実物を若干見せている。

デザインングへのコメントは、「乳児の発達理論、出まわっている遊具の状況などを含めた乳児を取りまく人的、物的環境状況などを踏まえつつ、こんな発達を期待したいという未来への展望をこめて遊具を画用紙上にデザインして下さい。素材、製作法に関しては、現在の科学や技術の水準では実現不可能と考えられる内容のものでもよい。(大人が未来をどう生きようとするかという展望なしに乳児の発達を太らせること、又、創造的コミュニケーションを彼らとの間に築いて行くことなど期待できないという授業者の想いがあった。)各デザインは、対象年齢(何カ月用か)、遊具のねらい、特徴などを事前に考えて取り組むこと。画用紙には、それらねらいなどをも明記し、使用のし方などの説明も入れ、色や文様などでもできるだけ実物に近いところまでつけること」というものであった。

休み明けの授業では、各自の遊具のデザインを1枚ずつ、意と匠との両面から評価しあえるよう提示する時間を設定した。

デザインングを通して学生は乳児の発達に対する自己の認識を把握でき、又他人のデザインと比較することで、更に乳児の発達に対する自己の認識を広げることが授業者の予想以上にできたように思われ、授業者も科学と芸術との統合への展望をもつことができたように思える。物をデザインしてみるという作業は、それ以前の自己の人間、自然、社会に対する観念(それ自身科学の対象でもある)を広め、深化することに有効な手段となり得ることも発見している。そしてまた、それはデザインが人間が生きることへの自覚と限りない未来への創造的展望の中でとり組まれるほど、実り豊かに拡大されるものであろうことを感じている。

さて、授業をふり返ってみて、今回は授業の作業仮説を十分設定し得ぬままにデザインングを導入してしまったところがあるが、次回は、さらに多方面の科学的成果を自覚的に統合化するという方向で、物と心との結びつけを深めて行きたいと考えている。

乳児の遊具について洞察してみることで、自然界と人間との広大な輪廻的關係の神秘性と科学性について、デザイン活動(ものづくりだけではなく)への参加する意義などを発見している。

#### 参考文献、資料

- 1) 齋藤貴子、「幼児の遊び」、新潟青陵女子短期大学研究報告第7号、P166
- 2) 和久洋三、『おもちゃから童具へ』、玉川大学出版部、1978
- 3) 柳田国男、『こども風土記・母の手毬歌』、岩波書店、1976、P32, 33
- 4) デ・ヴェ・エリコニン、「子どもの遊びの理論の基本的諸問題」、ソビエト心理学研究会、『ソビエト心理学研究』No.17, 18、P28~31
- 5) 棚瀬襄爾、「ゆうぎ」、『平凡社世界大百科事典22』P243~P247
- 6) 宍戸健夫、「保育の歴史」、風媒社、『現代保育入門』、1975
- 7) 小川正通、『世界の幼児教育』、明治図書、1970、P121~P128

- 8) 高山正喜久,『立体構成の基礎』,美術出版社,1975,P133
- 9) 教師養成研究会,『近代教育史』,学芸図書,1969
- 10) 岩崎次男,「フレーベルとモンテッソーリ」,明治図書,『近代幼児教育史』,1979
- 11) ア・エヌ・レオンチエフ(松野豊・他訳),『子どもの精神発達』,明治図書,1967
- 12) 西頭三雄児,『遊びと幼児期』,福村出版,1974
- 13) 高橋巖,『生きる意志と幼児教育』,ルドルフ・シュタイナー研究所,1979
- 14) ルドルフ・シュタイナー,『神智学』,イザラ書房,1969
- 15) 心理科学研究会編,『児童心理学試論』,三和書房,1975
- 16) ヴィクター・パバネック(阿部公正訳),『生きのびるためのデザイン』,晶文社,1978
- 17) 高田哲雄,「生きる芸術としてのデザイン」,日本デザイン学会,『デザイン学研究』,1975
- 18) 大智浩・佐口七朗共編,『デザイン概論』,ダヴィッド社,1974
- 19) M・Cエッシャー(岩成達也訳),『数学的魔術の世界』,河出書房新社,1976
- 20) Steinberg,The Inspector,The Viking Press,1973
- 21) Ernst Haeckel, Art Forms in Nature, Dover Publication, 1976